



九百里  
外史著

現代  
女性  
の  
解剖  
今

東京  
萬象堂藏

252  
698



女傑の解剖

明治  
40 1 9  
内交

## 現代女傑の解剖に序す

友人九百里外史は、余が莫逆の友なり、余と共に屢花紅柳緑の間に遊び、貴婦人社會に交り、常に女性の研究に腐心せる斯界の消息通なり。近頃一書を著はし、現代女傑の尤なるものを捉へて、之を分解し、交ゆるに批評を以てし、其觀察人情の機微に達し、女性の發動を説きたる、洵とに近來出色の文字なり、消息通にあらずんば、誰か之を能くせんや。盛裝せる美人、假裝せる婦人、此書に

よりて赤裸々となり、遂に色即是空に化せり。煩悶せる  
男性、懊惱せる女性、之を讀んで大悟する所あらん。

丙午歲晚

京橋々畔

墨 城 隱 士

## 自序

女ならては、夜の明けぬ國、女ならては、夜の明けぬ時  
代となりぬ。今の女性とは、如何なるものぞ、學者か、才女  
か、雪膚玉顔か、將た淫靡か、貞操か、二千萬人各其性情を  
異にし、其容色を同うせず。面長廢れて、お多福起る。時代  
の要求は、その如何なる女性に在りや。此書を讀みて、而  
して後之を知るあらんか。

獨寢のつれづなる夜

九百里外史

## 目次

### 下田歌子……………一

女流外交官——多感多恨の女性——庇髪の本家本元——  
女史も亦戀ありしか——奇策縦横の女策士——落花流水  
——黄なるべく黒かるべき心

### 鳩由春子……………二四

當世第一のお轉婆もの——屈理窟の大失敗——高平公使  
に冷かざる——政治的活動の價值

### お鯉夫人……………三六

二  
餌を與へたるは誰ぞ——女の女買ひ——濁りなき愛情——  
——俳優の女房——二度の新世帯——鯉魚龍門に登る——  
舉國一致の怨恨

福田英子

六三  
燃ゆる虚榮心——革命黨の仲間入り——墮落せる女壯士  
——色懺悔

奥村五百子

七二  
女化したる渡邊國武——女子獨立の代表者——男性化し  
たる所以——貴婦人俱樂部——大山元帥の一喝——野心  
と意志

奥謝野晶子

八〇  
當代一流の歌人——眼中たゞ美あるのみ——飽くまでも  
樂天的——詩人の特徴——彼れも亦女性なり

川上貞奴

九  
際物芝居——廣告の洋行

# 現代女傑の解剖

## 第一 下田歌子

### △女流外交官

大隈伯曾つて下田歌子を評して曰く「彼れをして男子たらしめば、優  
れ内務大臣の技倆を有す」と。蓋し女史が縦横の才を以て、自在の辯を  
弄し、能く衆心に献酬するの長を有せるが爲めなるべし。されど是れ  
恐らくは適評にあらざるべし、何んとなれば内務大臣が、權變の政略を  
以て、政黨社會を籠絡し、非政府黨を鎮撫するの時代は、今や既に遠く去

九百里外史著

り、凡百の政務、寧ろ眞面目にして公平なる頭腦に待つべきもの多ければなり、女史の奇才、豈に此の如き坦々たる平路に甘んずるものならんや。女史の如きは、即ち是れ天成の外交官たりと謂ふべきなり。試みに女史の勢力範圍を見よ、宮内省の一角を劃し、民間の一部を占め、九重の雲上より、埴生の宿に至るまで、下田系の女流を見ざるなく、延いて清韓にまで、其末派を有せり、是れ日英同盟を締結せる政府當局も、遠く及ばざる所ならずや。更らに女史の辯舌を聴け、坐談に長じ、演説に巧みに、義理明白、脈絡貫通、如何なる説難も、一たび女史の口に上れば、論じ去り論じ來りて、人をして首肯せざるはなし。是れ好箇の全權大使たる資格を有せるものならずや。女史の範圍は、一時世に驚しく、女史の才

名を知るものにして、又其艶名を知らざるはなかりき。されど女史は、今尙ほ貴族社會の女子教育を掌れり。女子の負債は、一時山積したるき。されど曾つて其家用に窮せしとなかりき。道德の制裁も、女史の名に累を及ぼす能はず、經濟の壓迫も、女子の身に痛を感せしむるに足らず。女子の外交的手腕の非凡なる、又推して知るべきなり。

### △多感多恨の女性

豊頬にして顔色紅を帯び、漆黒なる頭髮、高額朱唇、六十の坂を起ゆるも、枯木寒岸に倚るものにあらずして、垂柳風を待つ風の風情を見る。女史は正に多血質の體質を有せり。此體質を以て、孤獨の寂寞を感せざ



りしとせば、女史は確かに強健なる意志を有せる人物なり。されど女性に於て、鞏固なる意志は、殆んど之を求むべからず、女子も亦女性なり、奈何んぞ其多血質の特徴を、盡く空に歸せしむるを得んや。所謂多血質の特徴とは何ぞ、骨相學の一派は曰く、『多血質の體質に屬せるものは、血液の補給、頗る迅速なるを以て、感情鋭敏に、其肉慾を求むると、亦甚だ盛んなり』と。感情の鋭敏、肉慾の要求、是れ女子が果して意志の制裁によりて、之を抑壓するを得たりしか、蓋し暗黒裏の問題に屬せり。女子曾つて人に語つて曰く、『妾は飲酒を禁せり、妾若し飲酒せば、情慾勃焉として發動し、自ら制し難きことあり』と。女史既に多血質の體質を以て、動もすれば感情の犠牲となるを免れざらんとし、而して之に加ふるに

酒力を以て其發動を助くるあらば、情慾の制し難き、自然の勢たらずんばあらず。女史亦己れの弱點を知るものと謂ふべきなり。されど女史が、其能く弱點を解したるは、女史が曾つて之によりて、情慾の犠牲なりしとありしに因れるか、然らざれば其懺悔を爲すこと、何んぞ此の如く其素行の肯綮に中るを得んや。知らず女史の此犠牲に供せられたるものは、果して誰ぞ。

女史は明治の清少納言なり、其才華の煥發せるに於て、畧相同じく、其紫女の操行を有せざるに於て、亦稍異ならず、爐峰の雪、歌子の賜名、是れ古今の好一對話なり。清女をして明治に在らしめば、歌子たるべく、歌子をして王朝に在らしむれば、清女たるべし。されど女史の才に至つ

ては幾百千の清女を合するも、遠く及ばざる所にして、歌子女史は清女の如く、一方にのみ執着して、權門の忌避に觸るゝが如き愚を演ずるものにあらず。清女は記憶家たりしも、女史は應用家たり。清女の能は、六朝文學の丸呑み丸吐きに在り、女史の長は、和洋思想の總合演繹に在り。女史は此演繹を行はんが爲めに、有ゆる問題に接觸せんことを欲したりき。有ゆる社會と交際したりき。政治、文學、教育、社會改良より、衣服の裁縫に至るまで一通りの消息を解したり。大勳位、ハイカラ、山師に至るまで、其交際の範圍なりき。されば女史が、九重雲深き内裏の光陰に、早く飽きて、風雨多き在野の生活を求めたるも、亦其適用の才に富みて有ゆる問題に興味を有せるが爲めにして、女史が世間問題に色氣の多

き、又以て證するに足れり。感覺の鋭敏にして、感情の發動せる性格を有せるにあらずんば、何を以て能く此の如きを得んや。女史の多感多恨、蓋し之より來れり。

### △ 庇髮の本家本元

近時女學生の男女交際を説くもの、頗る多く、滔々たる庇髮、擧つて男性との吻合を望まざるはなし、而して十中の八九は、概ね戀愛の消息を解せり。知らず此庇髮の俑を作りしものは、誰ぞ。

庇髮はもと和洋折衷の髮なり、宮中女官の髮張りを、洋式束髮にしたるものにして、實に下田歌子女史の創意に係れり。女史も亦もと宮中

の女官なり、後ち歐洲に遊びて、半歐化したる人なり。されば女史の思想趣味は、和洋折衷のものたり、此思想趣味の産物として、庇髮を創意したるは、女史に於て當然の事にして、女史にあらざるば、誰か又此新發明を爲すものあらんや。現今女流社會の牛耳を執れるは、津田梅子あり、跡見花蹊あり、鳩山春子ありと雖も、純然たる鬢張り式にあらざるは、純然たる歐洲束髮式の女流にして、新舊兩派の調和を缺き、未だ重きを社會に置かしむるに足らず。獨り歌子女史時代の要求に應じ、時代の精神を代表して、奥様に不可ならず、女學生に格好し、男性を刎ね付けず、女性と離れずして、其交際線を、八方に擴張し、遂に男性との距離を接近したり。是れ女史が、後進幾多の女性に、親しく其實例を示したる所にし

て、若し女學生の墮落が多く、庇髮に在りて、庇髮は男女交際を重んずとせば、女史は決して其鼻祖たるを辭する能はざるなり。試みに女史の男女交際を、如何に實行せしかを見よ。

### △女史も亦戀ありしか

女史の交際範圍は、頗る廣く、其男性と往來を重ねたると、亦甚だ多かりき。就中伊藤侯の如きは、人の最も能く知る所なり。されど侯は、女史とのみ、親交を重ねたるにあらず、侯に親昵したるは、廣島に光菊あり、静岡に松壽あり、新橋に牡丹ありき。侯の歌子女史と親しみたるは、門戸開放主義より來りたるものなるべしと雖も、女史は未だ侯の如く斯

く迄に雅量を有せる者にあらず。侯と女史との親交は、縦令女史の自家勢力の増進に資せんが爲めなりしとするも、女史が他の男性との交際は、確かに一の戀情より來れるものありしと云ふも、不可なきが如し。女史が艶名を最も轟かしたるは、其望小太と往來せる時代なりき。されど望小太は、紛々たる輕薄子にして、女史は一代の才媛たるを以て、世人は兩者の關係を不釣合なりとなし、却つて其事實を疑ふものありと雖も、焉くんぞ問夫は、下層に在るの理を免る能はざるを知らんや。女史の歐洲に在るや、望小太亦倫敦に在りき。相携へて巴里觀光の客となりしも、幾回に上りたりと云ふ。後ち望小太先づ歸朝し、女史亦尋いで歸へるや、旅裝未だ解らざるに、女史は望小太の寓を訪へり。爾來

女史の望小太を訪ふ、日として之あらざるなく、女史の到るや、望小太傍人を斥けて、偶坐時を移すを常とせり。望小太曾つて其母の喪に遇ひ、駿州田子浦に殞するや、女史亦到りて喪を共にせり。すべて此間の消息、多く之を説かざるも、人の之を付度するに難からざる所にして、女史と望小太との同盟は、其巴里旅行中に結ばれたるや、知るべきなり。

夫れ愛の情たる、之を君臣の間に存すれば、仁となり忠となり、之を父子の間に存すれば、慈となり孝となり、而して之を男女の間に存すれば、即ち戀となる。女史と望小太の關係、既に彼れの如く密なりとせば、望小太の女史を愛し、女史の望小太を愛せるは、事實なり。愛既にこゝに存せば、戀豈に之に伴はざるを得んや。

### △奇略縦横の女策士

女史と望小太の關係漸く世評に上り、女史の艶名、天下に傳はるや、女史は如何にして、之を取消さんかに腐心しぬ。女史の弟某の妻に堀江某女あり、佛蘭西に留學し、佛語に巧みに、才色甚だ秀でたりしが、女史と望小太との關係漸く人に知らるゝに及び、女史は常に此女を携へて、望小太を訪ひたり。而も女史は猶ほ之を以て、人の怪訝を解くに足らざるを思ひ、一醜婦の資産を有せるものを、望小太に媒合せんとし、望小太亦稍意動さしも、持參金の額に至つて破綻するや、女史は之を機として、斷然望小太の關係を絶ちぬ、是れ女史が初めより其然るべきを看取

したる所なりしも、望小太の關係を絶たんには、先づ何等かの問題を以て、兩者の交情に水を入れ、望小太の情動くを見て、其己れに對する情の薄さを名とし、以て其同盟を破却せんとしたるものにして、彼の醜婦は、實に女史が反間政略の犠牲に供せられたるものなりき。されば女史の如きは、到底戀愛の爲めに、一身を誤るが如き、一般女性の愚を襲ぐものにあらずして、彼れは如何なる同盟條約も、社會上に於ける地位に、惡影響を及ぼさんとする愛あれば、直ちに之を破却するに躊躇せず、されど這般の英斷は、女史が其意志の力を、籍れるに非ずして、理性の明に待ちしものなり、女史にして意志の力強かりせば、何んぞ其同盟を彼れに結び、是に訂ださんや。

女史曾て負債の山積するや、其生活状態を一變して、故らに華族女學校門前の矮屋に移住したりき。華族女學校學監にして、九尺二間の長屋に生活するは、學校の體面に關せずとなし難し、人怪んで之を女史に問へば、女史は悄然として、其負債の多きを述べ、以て其同情を集注しぬ。果せる哉。居ると數月ならずして、女史の負債は、何人かによりて償却せられ、女史は久しからずして、此賁生活を脱するを得たり。

女史の實踐女學校を設立するや、四方に奔走して、其基金の寄附を求めぬ。一日、大養木堂を訪ひ、爲めに應分の寄金を求めたりしが、木堂は政界の策士、以爲らく歌子女傑たるも、乃公瓢箪餘の應對を以て、之に當らば、其目的を達せしめざらんと、心私かに女史を侮れり。既にして女

史を延見するに及んで、其色ツばき態度を以て、艶ある辯舌を振ひ、木堂をして遂に數十金を出さしめぬ。女史去つて後ち、木堂人に語りて曰く、「余今に至るまで、未だ寄附金を人に奪はれしとなし、其之あるは、實踐女學校を以て始めとなす」と、女史の折衝に長せる、概ね斯の如し。

華族女學校の學習院女子部に改めらるゝや、校長細川潤次郎氏毫も與る所なく、其辭令を握りて、始めて之を知り、大に驚愕したりと云ふ。而して女史其部長となり、細川氏は排せられ、教頭亦斥けられたりき。蓋し此組織變更は、女史の献策に係る所多かりしと云ふ。

華族女學校は、上流社會の花嫁養成所なり、下田學監は、高等結婚媒介請負者たり、花嫁を求むるものは、概ね下田學監の手を通して、華族女

學校を參觀し、女史も亦自ら喜んで、其媒介の任に膺ると云ふ。而も女史の媒介は、上流社會に限るにあらざして、少壯有爲の青年、他日自家の用に資すべきものを見れば、他人をして女史が、淑女の媒介に意あるを傳へしめ、以て已れに倚らしむるの念を厚うせしむるとありと云ふ。女史が今日に於て、朝野に跨れる勢力を博し得たるもの、此種結婚媒介政略、與つて多きに居らすんばあらず。女史の手腕、確かに老猾なる待合の女將も、三舍を避くる所たり。

### △落花流水

曾つて人あり、女史に問ふて曰く、『平家物語中、女性の悲哀美を現はせ

るもの多し、祇王祇女の如きあり、横笛の如きあり、静あり、千壽あり、凡そ我國の史上、此時代程、女性の美を後世に貽したるはあらざるべし。女史此數者中、特に誰に同情を寄すべきかと。女史答へて曰く、『千壽なる哉、千壽なる哉、妾は千壽の前が、亡國の公子重衡に、同情を寄せたるが如く、また其重衡を慕へる可憐なる女性に同情を寄す』と、女史が新體詩を以て千壽を歌ひたるは、即ち之より來たるものにして、女史の精神的作なりと云ふ。

### 落 花(千壽)

燭暗數行虞氏淚、

御憚はしやいとほしや、

夜深四面楚歌聲

昨日は翠帳紅圍の裡に

錦を重ね綾を敷き、  
 比翼連理の夢さめて、  
 御身とならせたまひては、  
 狐猿の友を呼ぶ聲ならで、  
 一樹の蔭一河の流れも、  
 鴛鴦の衾は重ねずとも、  
 且暮たづさひまゐらせし、  
 何時の世かは忘られん、  
 落花いかでか留るべき、  
 露のゆかりを忘れずば、

御寐りしたまひけん、  
 今日東に捕虜の  
 旅雁の妻をしたひ、  
 寐覺こと問ふものやなけん、  
 他生の縁と聞くものを、  
 ひとつ席同じ床に、  
 君が衣の移り香の、  
 流水去つて還らずば、  
 假りの宿りに結びつる、  
 清さみぎわに咲くといふ、

蓮の臺の上にだに、

千壽の重衡に對する同情は、實に女史の歌の如し。若し重衡をして、奢る六波羅の公達ならしめば、千壽の前は、決して一片の同情をも寄せざりしなるべし。重衡の逆境、偶千壽が深き同情の種となれりとは、女史の見解にして、此新體詩は、即ち此見解を基として、叙し起せるものなり。されば千壽の時を得たる源氏に、想ひを懸けずして、此憫むべき亡國の公子に、情を寄せたるは、其弱點に乗じたるものにして、即ち是れ亦一の間夫を下層に發見したるに外ならざるなり、何んとなれば重衡よし公子にせよ、千壽縦令舞妓にせよ、境の順逆より云へば、重衡は捕虜なり、千壽は時の名花なり、恩故ある鎌倉方を棄て、未だ鴛鴦の衾を重



ねざる平房に歸せるは、確かに喬木を下りて、幽谷に入りたるものなればなり。女史の伊藤侯に執着せずして、一白面書生たりし望小太に交を結びたる、殆んと之と大差を見ず。されど女史は、千壽の情を有するも、未だ千壽の熱を有するものにあらず、落花情あるも、流水意なきことありしは、其容易に同盟を破れるに徴して明かなり。女史の交際は、皆是れ露の契り、微風一たび來れば、忽ち瀉下す、豈に蓮の臺の上に、久しく清香を止むるを得んや。

△黄なるべく黒かるべき心

女史又曾つて好んで村上佛山の棄歸行を誦せり。

猶有新月眉。猶有白雪肌。恠來同穴契。忽爲生別離。君心可黃又  
可黑。百年便妾泣。練絲。唯願留妾連理帶。裂爲良人履頭篋。妾身  
分一死。奈胎中有兒。珍重當鞠養。定與君顏似。縱令有掌上珠。  
靡父又何怙。涕淚如雨將上車。梨花無力有誰扶。仍是良人所平寫。  
十襲懷來離婦書。

是亦女性の悲哀美を歌へるものにして、女史は此詩を以て、近代漢詩の絶調となし、時に醉に乗じて、朗々吟じ出すとありしと云ふ。凡そ女史の強度なる同情を寄するは、悲哀美に在り、千壽の前は、重衡の悲哀に加ふるに、千壽の悲哀を以てしたるものにして、悲哀中の悲哀たり。されば女史は平家物語中、祇王祇女の悲哀を斥けて、之を推したるも、亦其

の對手とせし所は、威權日月と光輝を争へる清盛なりしが爲めに在りき。楽婦行に至つては、女性の最も悲惨なる境遇を想像せしものにして、夫を怨み、兒を思ひ、人世女性として、復た此の如き悲あるなし。要するに女史の感情は、頗る強度なり、故に其發動する所、亦強度なる作用を満たすに足る、大悲慘を求む。されど此強度なる感情は、久しく持續せらるゝものにあらずして、忽ちにして亦黄なるべく、黒かるべきに至る。女史の文學的趣味、亦其多血的體質の影響を受くる所多きを知るべきなり。

聞説く女史今齡六十有一、未だ一毫の白髪を見ず、人は傳ふ、是れ實盛

の故智を襲げるものなりと。知らず其壯者に伍する所、果して那邊に存するか。藤老漸く著し、望小太亦定婦あり、鐵山師今何くに在るを知らず。巷説又傳ふるあり、曰く女史の親近せる男性三あり、皆其齡四十に前後すと。涅髮の要、それ或はこゝに在るか。又以て女史の交情、常に下層に墮なるを窺ふに足らん。若し夫れ女史が社交界に立ちて、才略縦横なるを見るは、今仍は昔しの如しと雖も、是れ新喜樂の女將が、巧みに來客を操縦すると同じく、固より女史の衷心、之を親しむものにはあらざるなり。女史も亦一代の交際家たりと云ふべし。

## 第二 鳩山春子

### △當世第一のお轉婆もの

鳩山春子は、當世第一のお轉婆ものなり、お轉婆ものとは他なし、屈理屈屋の義なり。女子の唱ふる理屈は、盡く是れ屈理屈に過ぎず、屈理屈を鳴らして、可憐なる女性の本領を失へるは、お轉婆にあらすして、何ぞ。

夫和夫の曾つて衆議院議長となれるや、春子は開會中常に傍聽席に在らざることなく、以て其夫の手腕如何に注目せり。曰く、「妻として夫を思ふは當然なり。されば妻は夫の名譽を以て、己れの名譽となし、夫の失態を以て、己れの失態となし、霎時も夫の成效を祈らざるなく、こゝに

來つて傍觀するも、亦之が爲めのみ」と。女性は多少恥らう所ありて、人をして可憐の情を發せしめ、而して之によりて、男子をして女子を愛せしむるの大原因となれり。而も春子の如く、露骨にして、一直線の屈理屈を唱ひ、臆面なく惚けを、人に吹き掛くるに至つては、和夫と雖も、愛想を盡かさざるを得んや。天下を操縦するの政治家に妻たるものにして、男性の操縦策を解せざるは、甚だ政略に迂なるものと謂ふべし。

衆議院議員の選舉あるや、牛込小石川は、鳩山の根據地たり。春子乃ち自ら其夫の爲に運動するを例とせり。彼れは其夫と手を携へて、戸毎に選舉有權者を訪問し、其投票を與へんを乞へり。此の如きは一般女性の、死地に導かるゝの感を爲す所、而も彼れは平氣を以て、之を

行へり。其お轉婆蓋し尋常一様にあらざるなり。和夫にして有難迷惑の感なくんば、和夫も亦鼻口の距離、相去る其だ遠きを免れざらんとす。されど天は夫妻の配合を巧みにし、懶惰なる男性には、勤勉なる女性を配し、美容ある女性には、醜悪なる男性を合し、多病者には、強健者を和し、才ある者は、愚なる者に、鋭なる者は、鈍なる者に、互に相倚り相扶けて、以て家を成さしむ。和夫は學者なり、政治家なり。されど悠々自ら逼らずして、小才の利かざる男なり。春子は氣鋭く、人に肉薄する底の女なり、和夫の短を補ふに、春子の長を以てしたるは、是れ亦似合はざる夫婦が、却つて似合ひし夫婦たる所以ならずとせざるなり。春子は、それと和夫に於て、重寶なる世話女房なるか。

### △屁理窟の大失敗

春子の屁理窟は、多くの場合に於て成効せり、其成効する所以は、春子上の人物は、此屁理窟の應對を以て、其煩に堪えずとなし、格別の害を被らざる限りは、彼れの云ふ所に反對せざると、春子以下の人物は、之を以て眞理となし、自家の利とならざるも、理窟の前に抵抗する能はざるに在り。而も一旦眞面目なる人物に遇へば、屁理窟は屁理窟として、滔々論破せられ、又三文の價なきに至る。

現京都文科大學長狩野亨吉氏は、哲學者にして又甚だ眞面目なる教育家なり。其第一高等學校に長たるに方り、鳩山氏の子息、之に學びた

りき。當時校則として、學生は盡く學校に寄宿せしめたりしが、春子は其子息の學校に寄宿するを厭ひ、屢々其通學を許されんことを、狩野氏に乞ひしも、聽かれざりき。是に於て彼れ一日自ら狩野氏に面會して曰く、「學生寄宿問題は、要するに、社會上の惡感化を被むるを憂ふるに在り、若し其生徒の家庭にして、善良ならしめば、之を許さざるの理由なきにあらずや」と、盛んに自家々庭の効能を説き立て、法學博士、政治家、教育家たる鳩山和夫の家庭を以て、神田、本郷の下等なる下宿屋と同一視するは、見當違ひの論なりとなし、見事狩野校長に、一本を參へらせんとしたりき。狩野氏は餘り言辭を多く弄ばざる人なり、謙遜にして誇らず、最も君子風を帯べる人なり。されど春子の要求に對しては、斷々乎として之を拒否し、「縱令其家庭が如何に善良にして、社會の感化に憂ふる所なしとするも、學校には自ら其教育方針あり、二鳩山氏の事情を以て、多數學生に對する方針を枉ぐべからず」と説き、更らに進んで、「貴女が左程に、貴家の家庭を以て、學校教育上の價を認むとせば、何故に令息をして、學校に入學せしめたるや、宜しく退學せしめて、家庭教育を施すべきなり」と言はるゝに及んで、流石の屈理窟屋も、亦答辭する能はず、去り、とて其儘辭し去らんには、狩野氏の拶揆、如何にも飽もなく、味もなくして、立ち場あしく、只其顔色を赤らめ、無言良久うして、漸くにして遁るゝが如く去れるとありき。彼れの屈理窟は、此の如き朴直なる君子に對して、何等の効力をも有するものにあらず。彼れをして其面目を失はしめ

たるは、恐らくまた此の如きはあらざるべきなり。

三〇

### △高平公使に冷かざる

鳩山和夫が大博士の學位を、エール大學に受くるに方り、彼れ亦夫と共に米國に赴きぬ。ヤンキーは、此異人種の異夫婦を歓迎すると甚だしく、鳩山夫妻は、彼處に招待せられ、是處に招待せられて、日も是れ足らざりき。春子之を以て無上の榮譽となし、日本女流の代表者を以て、自ら許し、到處演説を試みて、盛んに日本に於ける女性の爲めに、其位地を進め、其權利を擴張するの必要を説きぬ。當時高平小五郎氏、亦公使の任を帯びて、彼の地に在り、常に席を同うして、春子の言を以て、甚だ出過

ぎなりと思ひ、彼れに一針を與へて曰く、「貴女よ、日本女子の位地を論ずるに先だち、宜しく貴女の夫和夫君の事を願われよ、和夫君の艶名は、本國に於て噴々たるものあるにあらずや、己れの夫をして攀柳折花の風流わらしめ、而して却つて女子の地位を説くは、寧ろ滑稽に價せざるか」と、春子の柏手せられ、喝采せられて、得意萬幅となり、大に調子付きたる議論は、公使の一矢によりて、脆くも碎け、根顔黙し去つて、又言を重ぬる能はざりしと云ふ。恐らく此復仇は、之を高平氏に試むる能はずして、夜更人定つて後ち、夫和夫に詰責するに、其平生を以てし、和夫をして手を焼かしめたるものありしならん。而も高平氏の言は、一場の椰楡に止まらずして、洵とに其緊背に中りしものたらずんばあらず。

抑も男女兩性は互に獨立すべきものにあらざして、相倚り相扶けて、長短相補し、以て圓滿なる家庭を組織すべき命を帯べるものなり。若し女子にして男性を帯び、男子の領分に切り入ると甚だしければ、男子は必らず他に命維れ従ふの女性を求めて、兩性の調和を圖るに至る。和夫の攀柳折花なるものは、實に春子が、餘りにお轉婆なるに厭氣を生じて、其慰藉の法を、他に求めるに過ぎず。春子女史之を是れ知らずして、徒らに女性のお轉婆に至るを以て、女子の品位を高むと爲すは、決して其天命を全うする所以にあらざるなり。

### △政治的活動の價值

日本の法律は、女子に衆議院議員の選舉權を與へず。されど春子女史の如きは、確かに有力なる選舉權を有せるものなり、一方より之を見れば、彼れは法律の禁制を破れる罪人たるを免れず。彼れが小石川牛込方面に於て、選舉有權者の細君を籠絡し、細君連をして、更らに其夫を絡籠せしめ、以て夫和夫の選出に資せる運動は、優勢なる力を有せり。彼れ己れ一人法律の精神を無視せるのみならずして、又他の女性をして法律の精神を無視せしめつゝあり。選舉は最も人の自由意思を尊重すべきものなり、黄金を以て、選舉人を誘惑すると、愛情を以て、誘惑するとは、共に選舉を神聖ならしむるものにあらざり。若し春子にして眞に政治的思想あらしめば、宜しく先づ天下の屁理窟家女性を糾合して

堂々と女子に参政権を與ふるを、國家に要求し、此權利を得て、而して後ち正々選舉界に活動を試むべきなり。何んぞ忍び忍んで、弊害多き細君絡籠策を施すの必要あらんや。是れ政治家の公德を解せざるの行爲と謂ふべきなり。思へば彼れが政治的運動なるものは、國家の政治上、鏗一文の價あるものにあらずして、唯其夫の名譽を本位とし、夫の名譽の爲めに動くに過ぎず。其危険も、亦甚だしからずや。而も之を以て女流政治家を氣取るに至つて、更らに一段の危険と滑稽とを思はずんばあらざるなり。

若し春子を以て、之を他の女性に比せんか、彼れは下田歌子の如き才

あるにあらず、奥村五百子の如き意志あるにあらず、福田英子の如き狂熱あるにあらず。其學識に於けるも、亦春子以上の人物、女流社會中濟々人多し。而も彼れが時代の流行女となりしは、必竟其能くお跳ねなりしが爲めにして、お轉婆の標本は、今の時之を彼れに譲らざるを得ざるなり。されど彼れも亦一代の名物女たるを失はず、鳩山和夫、渡邊無邊の二人をして、相競争せしめ、和夫の貴公子にして、無邊の貧書生たり、醜男子たるを以て、無邊に靡かずして和夫に之き。遂に無邊をして終生無妻主義を執らしめ、一代の名物男たらしめたるは、皆彼れの爲めなりしとせば、彼れは儘かに此名物男を産み出せるものなり。名物男を産めるもの、是亦一の名物女ならずや。



## 第三 お鯉婦人

身はもと濱町の料理店庖丁の養女、花江柳緑の間に人となり、世に時めきし桂伯爵の寵愛を得、朋輩に其出世を羨まれたりしも、槿花一日の榮華とや、焼打事件の騒動に、廣き八百八町に、一身を置く處なく、都を跡に身をやつし、返子とやらんに赴きて、雲隠れにし一夜より、片破れ月の圓かならぬ、夢路は昔を戀ふるとかや。そもお鯉夫人の半生は、幸福の歴史なり、人情の歴史にわらずして、淫奔の記録なり。朝に源氏を送り、夕に平家を迎ふる、仇し、枕の契りを結ぶは、天下彼の女一人に限らずとは云へ、人情を彼れの如く犠牲にし、情慾を彼れの如く縦まゝにしたる

は、當世稀れに見る所にして、是れを藝妓社會に於ける時代思想を最も能く表白したるものなれ。

## △餌を與へたるは誰ぞ

お鯉とは、藝名なり、本名はてる。日本橋濱町に彌生と云へる料理店あり、今は待合となれり。お鯉は實に此料理店の養女なり。天成の麗質に加ふるに、粹中の粹に人と爲りければ、幼き頃より來客の注竟を惹き、姫子松まだ引く程の齡にあらねど、其中には子の日を期して、手植ゑせんと、心を碎きしものも多かりしと云ふ。其中に矢島某とて、兜町の相場に、一攫千金の一夜大盡ありしが、寝ても覺ても、お鯉の姿忘れ兼ね、

何とかして彼れを手に入れんものをと、思ひにやつれ居たりしも、また  
 蕾の花、其いちらしき口紅は、徒らに矢島に思ひを燃え立たしむるのみ  
 にて、價を待つて賣らざりしが、謠よ舞よと其筋の修業も、先づ人並みと  
 なりければ、新橋の近江屋と云へる藝妓屋の抱子となりて、愈左禰とる  
 身の上とはなりぬ。されば彼れにあこがれたたる矢島は、今迄は賣品  
 と札の附かざりし爲め、手控えしたれ、既に斯くなりし上は、何をか購<sup>たぬ</sup>購  
 ふべき、如何なる競争入札をも厭はずして、先づお鯉の前借金を引受け、  
 所謂地前藝妓とはなしぬ。

凡そ花柳社會にては、如何に花の顔、雪の肌、新月の眉とは云へ、之をあ  
 やどる綾錦、さては金剛石の指輪、金の腕輪のあらざれば、さまで其聲價

を高からしむると難く、大方はよき金穴を生捕りて、自家の勢力扶殖を  
 圖るものなるが、お鯉には、幸矢島と云へる金穴のありければ、苟も流行  
 と云へる流行、髪飾にまれ、衣服にまれ、望みて得られざるなく、欲して購  
 はれざるなく、矢島が兜町に於て、千辛萬苦活戦の懸引も、皆お鯉に貢が  
 んが爲めなりき。さればお鯉の名聲は、忽ち新橋界限に轟き、朋輩に其  
 身の上を羨まるゝのみか、知るも知らぬも、新橋にお鯉と云へる流行子  
 のあるを噂せしが、是れぞ彼れが、登龍門記の第一頁にして、矢島は實に  
 お鯉に水を與へ、餌を與へたるものなりし。されど又彼れは、到底お鯉  
 の好い男たる資格を有するものにはあらずき。

### △女の女買ひ

四〇

女が男を買ひ、男が女を買ふ、人を情慾の犠牲に供し、黄金萬能を以て、醜態を演ずるは、人倫沙汰の外なれど、女が女を買ひ、男が男を買ふに至りては、更らに之より甚だしきものあり、お鯉夫人の如きは、破倫の極に達せしものならんか。お鯉は既に新橋の藝妓となり、矢島に落籍されて、地前となりしも、其競争者の多くなるに随ふて、慾念も亦た増長し、苟も黄金のある處は、彼れが秋波の濺ぐ處にして、若し矢島以上の金穴あらば、矢島以上の秋波は送らるべく、義理も情けも、彼れの眼中には、全くせりなり。されば彼れが此主義によりて、忽ち生捕りたるは、當時實業

界に其人ありと知られたる池田謙三氏にして、之をしも拿捕せし以上は、黄金の山に入りたる心地せりき。斯くして彼れは矢島と池田氏とを金穴となし、其他幾小金穴を發見し、採掘して、宛ながら鑛山大王の觀ありしが、黄金の慾望、こゝに満たされて、更らに一の慾望は、生じ來りぬ。こゝに中村某女と云へる、西洋人の妻となりて、烏森に住める淫婦あり。平生好んで男装を爲し、烏羽玉の黒髪の色も香もなきやるく、巻き、大胡座にベランメイ、花札引きに、日を暮しが、此女何の呼吸を解してや、藝妓買が大好物、一回二回は金離れ好きも、三回四回よりは、藝妓の方より貢ぐと、なり、新橋界限で、一時「中村さん」の嬌名を傳へられたり。お鯉も亦此「中村さん」に買はれ、「中村さん」を買ひたる一人なりき。矢島

を絞り、池田を欺きたる過半は、所謂「中村さん」に奉り、「中村さん」と待合に耽れりとか。されど如何にして「中村さん」は、斯く迄に好い女なりしかは、彼れが一毫だも口外せざりき。一人は傳ふ。中村は常に匕首を懐にし、若し待合人定つて、電燈影慚く暗し、夜を戒しむる柏子木の聲と、鍋焼餛飩の聲以外、四隣閑然たるの時……此時の消息を漏らすあらば、其匕首を以て、酬ゆる所あらんと、其買ひたる藝妓を威嚇するとか、お鯉にして他の俳優を買ひ、俳優と痴話するものならしめば、其情人の怒に觸るゝこと強ちなしとせざるも、相手とする所は、婦人なり、表面の道樂は弄花なり。されば人多く其「中村さん」との関係に於て、深く疑を挿まず、唯其氣前を買ひ、弄花に耽るのみと思へき。彼れの淫靡は、此暗々裏に於

て、如何に醜態を極めたりしや、人の之を知るを許さざる所なり。

### △濁りなき愛情

戀は、人生自然の情なり。操を賣り、色を賣り、身を賣り、女性と云へる者を、一の商品と爲す者と雖も、濁りなき愛情は、何人かに注がれざるを得ず。寧ろ賣買にまで、提供して自然を矯むる丈、半面には、却つて自然の情の最も清き者を、發動せしめざるを得ざる必要に驅らる。花柳界に於て、戀愛の極致を往々見るとあるに、必竟之が爲めのみ。さればお鯉と雖も、亦人類なり、既に人類なる以上は、全く戀愛を殺して、其發動を抑ゆるを得べきにあらず。よしや「中村さん」とやらによりて、或る慾

情を充たすを得たりとするも、是れのみにては、未だ其心的満足を得る能はず、是に於て、眞に男性との吻合を得て、其濁りなき愛情を注がんと欲するも、亦無理ならじ。恰もよし、池田謙三氏一日お鯉を賣めて曰く、『お前は、女を買ふさうだ。男が女を買ひ、女が男を買ふは、またしも、女が女を買ふは全く破倫の沙汰である』と。流石は池田謙三氏、彼れの『中村さん』を買へる消息に、領付きけん、お鯉に向つて、頂門の一針を與へぬ。さればお鯉は此一言に逢ふて、面を掩ひ逃れ匿るゝかと思ひきや他日龍門に登らんとする怪物なれば、池田氏の如きは、殆んと其眼中に置かるゝものならず、彼れは池田氏の言を捉へて、逆捻りして曰く、『それでは男を買ふて、よろしうございますか』と、池田氏駭れながら答へて曰く、『役

者買位ならば、世の中に例のないでもないが……』と、彼れは復た直ちに一步を進めて曰く、『それでは妾は、役者でも買ひませうよ』と。せうよ、甚だ不確定なるが如くして、實は既に確定せり、確定せるものは誰ぞ、當時男地獄と呼ばれたる市村家橘今の羽左衛門、即ち是れなり。

此頃お鯉は既に矢島某に落籍されて、近江屋を去り、別に近傍に一戸を構ひて、『てる近江』と號し、これより彼の料理店、此の待合へ出でたりしが、彼れはこゝに實母を養ひ、又他の少女を養ふて、其子とせり。家橘と關係を生じてより、初めは密々に忍び合ひたりしも、後らには公然と此家より家橘を出入せしめ、家橘も亦之れに甘んじて、『てる近江』より劇場へ出勤し、誰に憚る所なかりき。此消息人口に上りて、池田謙三氏は、餘

りに氣乗りせざりしが、矢島のみは、如何にお鯉が、亂行非行を敢へてするも、忠實に見舞ひ、側目も振らず、十年一日の如かりし。されどお鯉は、靦面に其恩人の控ゆる爲めに、尙ほ家橘を以て、男妾けと爲したれ、未だ所天とば仰ぐに至らざりし。

### △俳優の女房

身を戀の淵に沈めては、世のなりはひの仇波も、物の數かは、只其淵の深きをこそ、祈るものなれ。お鯉が黄金佛の崇拜も、女性不動の如く、劔を持てる中村佛の參拜も、家橘と情交を重ねてより、ふツつりと思ひ切りたる如く、一切其身を犠牲として、家橘を夫とし、妻と呼ばれんことを望み

たり。人世は到底自然に歸せざるを得ず、情を賣り、色を鬻ぐは、人情の自然に最も悖りたる事なり、女が女を買ひ、男が男を買ふは、更らに情慾の變則的發動なり。斯くの如きは、一時の情を慰め、一時の忍耐によりて行ひ得るも、永久の關係を作り得べきにあらず。さればお鯉が池田謙三氏に鼻をあかし、矢島某を踏みつけ、『中村さん』を買ひしも、一度家橘に逢ひ初めて、二度の逢ふ瀬を樂しみ、果ては百世の契りを結ばんと思ひたるこそ、情を鬻がす、色を賣らざる、真正の彼れが女性として、又藝妓社會の常情とすべきものなれ。家橘も亦其情に絆またされけん、遂に夫婦として、世間手廣く暮らすを得るに至れり。

是より先き矢島某は、兜町に失敗して、負債山の如く、暫く都を落ちの

びて、大阪に赴き、戀しきお鯉に別れて、浪華江の葦の長き夜を、一人寝の旅枕に、うき年月を送りしが、お鯉の市村家橋に嫁づくに方りては、彌生の女將より、たい一片の郵書もて、此度お鯉良縁ありて、他へ嫁ぐとを通知したるのみ。矢島之を見て、大に驚愕し、失望し、落膽せしも、今は昔の身の上ならで、又奈何とも詮術なかりき。

お鯉の家橋に嫁ぐや、百方身上を繻縫せり。彼れは幾多の情人ありき。剩さへ「中村さん」と云へる情婦もありき。特に市村家橋——其花婿——には、少なからぬ入れ上げをなしたりき。されば彼れの負債は、中産者の破産すべき程に上れり、彼れは此負債を有するが爲めに、家橋——花婿に、愛憎を盡かされんことを憂ひたり、家橋の姉——彼れの姑に

して、家橋を養ひ育てたりし人に、馬脚の發見せられんことを苦しめり、而して又其實母と養女との處分をなさんが爲めに、更らに借金の上塗りを爲し、飽くまで家橋一家の驕心を買はんとしたり。彼れは斯くして有ゆるものを犠牲として、こゝに市村家橋の花嫁となり、朋輩が家橋を手に入れんとして、競争したりしを、己れ一人にて占めたる心地して、一時は功名手柄と羨まれたりしも、此結婚も亦不自然のものなりき。

お鯉の家橋に嫁ぎたるは、お鯉の濁りなき愛情を、家橋に捧げたるものなりき。されど家橋のお鯉を娶りたるは、お鯉が家橋を思ふ程、濁りなきものにはあらず、寧ろ大に濁れり、濁流滔々、人情の岸は缺けたり、崩れたるものなりき。さればお鯉の朋輩同志が、時に家橋に、其餘りに薄

情なるを詰るとわれれば、彼れは冷然として云ひけるやう、「役者と云ふものは、人氣で持つて居るから、さう一人に許りカマリ附いて居ることが出来ない」と。家橋のお鯉を娶りしは、全く此寸法に外ならざりしなり。果せる哉、お鯉家橋は、同棲一年半にして、お鯉の負債、漸く馬脚を露はすに及んで、お鯉は家橋の家を逐はるゝに至りぬ。お鯉と家橋とは、人情を犠牲にし、色を賣り、媚を賣り、人氣渡世を爲すに於て、男のお鯉とし、女の家橋とし、エクオールなりと雖も、此關係に於ては、家橋の商賣氣質、儘かにお鯉の上に在りと謂はざるを得ざりしなり。

### △二度の新世帯

お鯉が家橋の家を去りて後、再び近江屋に身を投じて、瀕り江に住む身となりしが、恰も矢島は、既に大阪より上京して、また一花を兜町に咲かせし頃なりければ、執念くもお鯉を尋ね來りて、舊に變らぬ情けを注ぎ、お鯉も亦失意の時代なりければ、表には驩び迎ひて、遂に矢島をして、またく其身を落藉せしめ、近江屋の傍らに二度の新世帯を持たしめぬ。されど未熟は、尙ほ家橋に在り、矢島がお鯉に執着するが如く、お鯉は家橋に執着し、矢島の眼を忍びては、打撈へて鎌倉に、大洗に、小町園に春の夜の短かさを恨み、魚來庵に夏の日の永きを忘れしことも數多かりしとかや。

夫れ花柳社會の理想は、黄金にあらざるなり。家庭にあらざるなり



美服、美食、大厦、高閣、名譽、安佚、皆彼等の理想にはあらざるなり。されど此等は、又其慾望を満たすの手段として、或る程度まで要求せらるゝものなり。彼等は飽まで美服を纏ひ、飽くまで安逸を貪り、飽くまで黄金を貯ひ、大厦に身を置き、出來得べくんば、名譽をも揚げ、而して飽くまで俳優を買ひ、觀劇に耽り、美味を食ふに在り。數へ來れば其慾の深き、其望の多き、また此の如きはあらざるべしと雖も、而も空想に驅られ、空想を追ひ、風船球の如く、何處に落ち付くか、身の果てをも知らぬは、彼等に若くものなかるべし。古より佳人薄命と云へるも、一は其餘りに希望の大なるが爲めに、世に容れられざるに因れり。藝妓社會が餘りに贅澤なる希望を抱くは、面憎しとも思へど、又其己が顔の、何時まで二八の春

の宿らざるをも知らず、覺束なき夢路を辿るが如き、空想に驅らるゝは、憫れむべきものなり。お鯉の如きは、此空想の最も大なるものにして、好箇の藝妓氣質を有するものなり。されど彼れのみは、獨り空想にはあらずりし、一々實行したるものなりき。たゞ其行末が、如何に變化を生じて、卒塔婆小町のそれに似たるに至らんか、將た九重雲深き上臈とならんかは、向後彼れが藝妓氣質を棄つると否とによりて定まるものならん。

### △鯉魚龍門に登る

お鯉が家橘の家を遂はれ、再び矢島の情けを受け、近江家の傍らに一

家を爲せし頃なりき、彼れは時の總理大臣伯爵陸軍大將桂太郎氏の寵恩を受くる身となり、桂伯は暮夜私かにお鯉の家を訪づれること屢々なりき。されば世は舉つて、お鯉の氏なくして、玉の輿に乗れるを羨み、同輩は、獨りお鯉の名譽のみならず、新橋の名譽なりと呼び、天が下藝妓社會の名譽なりと噂したれど、また江戸子氣質の朋輩中には、よしや身は總理大臣にあれ、伯爵にあれ、大將にあれ、恩人の矢島を振り付けて、金の威に靡くとは、如何に商賣とは云へ、餘りに操のなきことよ、役者に貢ぐとは、少しく筋の違ひあり、川竹の淵瀬定めぬ流れにも、自ら義理人情のあるものよと罵りたるもありき。由來江戸氣質は、弱さを扶け、強さを挫き、好んで人の餘弊に乗する一種の物好き癖なり。狹斜道徳の源亦

多く之より來れり。遮莫世の是非紛々たるも、お鯉より見れば、儘かに是れ龍門に上りたるものなり、藝妓として總理大臣の妾となれるは、伊藤侯の博愛主義の如きは、姑らく除外例とし、お鯉の前に人なく、お鯉の後ちに人なし。全く之れなきにあらざるも、公然——秘密ながらも——の妾とせられ、居宅を與へられ、夜なく、枕席に侍るを得たるは、お鯉を以て嚆矢となさん。そも左褌とる身の嬉しからぬことか。されど悲むべし、翠帳紅圍、夢未だ覺めざるには、はや傾城傾國の晋り起り、彼れが一身は、舉國一致の怨を受けて、暫し都を落ちのびざるを得ざるに至りぬ。

## △舉國一致の怨恨

五六

時は明治三十八年九月五日の事なりき、明治歴史の上に、特筆すべき大騒擾は起りたり。ポーツマウスに於ける、日露媾和條約は、國民の不足を買ふと甚だしく、國民大會は之れが爲めに日比谷に催されぬ。政府當局は此屈辱條約締結の責任者として、萬民熱罵の中に立てり。其聲愈大にして、會するもの益多く、而して政府の干渉、亦一層の嚴を加へぬ。新富座の演説は、解散されたり、日比谷の大會は、中止されたり。されど東より、西より、南より、北より、雲霞の如くこゝに寄せ來りし會衆は、全く解散せず、疾呼するも、政府當局の罵倒なり、偶語するも、媾和の不平な

り、警官の無法を叫ぶもの、當局の無能を唱ふるもの、日比谷原頭の殺氣は紛々たり、既にして會衆は、内務大臣官邸に向つて進みぬ。瓦礫は雨の如く官邸に向つて投せられ、警官は八方に奔りて、之を制せり。會衆は轉じて國民新聞に向へり、曰く政府の御用なり、國民新聞を破壊せよ、徳富は犬なり、撲殺せよと、瓦礫飛び、棍棒舞ひ、果ては白刃閃き、喚叫起り、國民新聞社は、半破壊せられたり。此時内相官邸は、又々暴徒の爲めに攻撃せられ、火は其一隅に起れり、劍光、銃影、日暮るゝに垂んとして、日比谷一帶の地は、政府罵詈の叫びを以て滿されぬ。傳ふるものあり曰く、外相官邸は今や焼かれつゝあり、總理官邸は、破壊せられつゝありと、悲語紛々、滿都騒然として居を安んずるものなし、既にして巡查派出所の燒

五七

打ちとなり、警察の攻撃となり、八百八街到る處に火起り、合戦となり、落城となり、悲鳴となり。呐喊となれり。是れより先き不時喇叭は一ツ橋門外に鳴り渡れり、武裝の兵士は、整列せり。小隊中隊の兵士は、幾隊となく、市内を巡行し、各官邸亦守るに兵士を以てせり。飛説あり曰く、桂總理の愛妾お鯉は、暴徒の爲めに殺されたりと、曰く瓢屋は、炎烟の中に葬られたりと。瓢屋は即ち大臣連の時々冶遊する所なり。されどお鯉は、幸に暴徒の刃を免れたり。瓢屋亦其火を免れしも、お鯉は此夜を以て、全く東京より拂ひ出されざるを得ざるに至れり。彼れと徳富とにして、若し此夜晏然其家に在らしめば、彼等の首は、既に暴徒の手に刎ねられたりしならん。何んとなれば此日騒動の起ると共に、お鯉徳富征伐の聲は

それよりそれと傳はりたればなり。されば彼れは此騒擾の起るや、逸早くも先づ身を其筋の保護に托し、番町の妾宅を立出で、身を男に扮装し、新橋停車場より、遠く逗子に難を避けたりしが、昨まで一身の榮華を誇り顔に、都大路を狭しどしたる彼れも、今は誰あつて一片の同情を寄する人なく、顧みれば都の空は、一圓に紅となりて、火は四方に起り、関く聲、叫ぶ音、修羅の巷も斯やあらんと思はれ、桂伯の身の上も必許なきのみか、其身は綾錦着つゝ慣れて、世にも人にも、女の中の女ぞと羨れし上の、今は淺まししの果てや、男の姿に振り替へて、世を忍ぶ肩狭き、岸拍つ波、松吹く風にも、もしや暴徒のこゝ迄來つるか、と、魂驚くと幾若干。斯くして彼れは龍門に登りしとは、登りしものゝ、忽ちにして此大悲劇に遇

ひ、水を得て、風を起し、雨を呼ぶ働きの、それに先ちて火攻めの身となりぬ。既にして暴徒の騷擾治まり、彼れ亦都に歸りて、番町の妾宅に住めりと云ふも、世は彼れを忘れたるが如く、彼れも亦世を忘れたるが如し。されど彼れの猶は忘るゝ能はざるは羽左衛門なりと云ふ。

牛は到底牛連れなり、馬は到底馬連れなり、不見轉氣質のお鯉は、又到底男地獄たる羽左衛門の引力に牽かれざるを得ず。よしや桂伯にして、彼れの有する總べての慾望を、満たさしむるを得るも、桂伯が政治上の活舞臺に立ちて振へる手腕は、彼れに於ては、俳優の一と力みにだも價するものにあらず、爵位も何かせん、官職も何かあらん、桂伯の趣味と、彼れの趣味と、桂伯の榮譽と、彼れの榮譽とは、全く其徑路を異にせるのみ

ならず、凡そ社會上に於ける榮譽の地位は、彼等に於て、一錢の價をも拂ふものにあらず、されば彼れが世人の羨望せる總理大臣に近侍せるに拘らず、彼れの引力は、常に羽左衛門を求めて、止まざるも、自然の數たりとせん。趣味を異にし、理想を異にし、主義を異にせるもの、何んぞ久しく其尻の落付くべき理あらんや。千尋の飛瀑を登りて、龍門に達せるも、而も其昔の泥水を慕ふもの、其泥水育ちの魂、必竟洗ひ去る能はずして、總理大臣も、伯爵も、彼れがお齒に合はざるが爲めのみ。されど彼れも、亦人傑なり、一賤女子の身を以て、舉國一致の怨恨を買ひ、お鯉の名をして、天下に轟かしむるに至れるは、慥かに徳富蘇峰等の企て及ぶ能はざる所にして、其善惡孰れを問はず、一代の藝妓を代表するに足る資格を

有するものたり。是れ豈に不見轉氣質を、最も巧妙に應用したるもの  
たらずや。

#### 第四 福田英子

##### △燃ゆる虚榮心

福田英子は、初め岡山の民権女史、中ごろ高等淫賣と化し、今は懺悔せ  
る尼となれり。女子にして餘りに生氣地を出し、權利を唱ひ、活動を試  
みるものは、却つて其墮落を來すと、往々にして多し。滔々たる女學生、  
是れ小福田英子にあらざるもの幾何ぞ。英子の墮落を誘致したるは、  
初め其虚榮心の餘りに強く、其活動の餘りに突飛にして、更らに其社交

の多く男性なりしに因れり。彼れは曾つて生意氣にも、小娘の分際を  
以て、革命黨の領袖稻垣示、大井馬城の一輩と交はり、民権の伸張を唱ひ、  
女權の擴張を論じ、日本の女性が、男子に抑壓せらるゝの苦痛を、己れ救  
世主となりて、之を救はんとしたりき。されど習慣は、偉大なる力なり、  
人類此世に生々して、幾千萬年、雌雄淘汰の結果、生存競争の必要、男女兩  
性を驅りて、こゝに至らしめたるものにして、百千萬の英子、如何に改革  
を唱道するも、將た何の効かあらん。果せる哉、彼れは其目的の一毫だ  
も、未だ達する能はざるに、身は早く孺兒の弄ぶ所となりて、可憐の處女  
は、滿身完膚なき迄に創傷を受け、惡むべき毒婦に化したりき。由來柳  
の枝には風折れなしと雖も、松の枝、杉の枝は、動もすれば折れ易し。英

子の如きは、松の枝、杉の枝なり。されど此枝折れ盡せば、又燃料にも供するに足らず、何を以て、棟梁の用に充つるを得んや。女性にして虚榮心に富むと過度なるものは、此無用の長物化すると多し、又慎まざるべけんや。

### △革命黨の仲間入り

英子が民権論に、女權擴張に、更らに進んで朝鮮事件の急先鋒に、一身を委ねたるの時代は、全く男性的にして、始め稻垣示、大井馬城の一輩も、容易に之に猥るゝ能はざりき。然れども大井稻垣等の隠謀家は、英子を籠絡するに、亦隠謀を以てし、其燃ゆるが如き虚榮心を煽動して、先づ

欠

MISSING



へて還俗歌人の妻となり、餓凍或は免れさらんとするか」と。されど品子は、遂に與謝野の家を去らざりき。

凡そ美想の上には、餓凍も、亦一の美なり。縹緲も、錦繡に優るとあるべく、玉殿も茅屋に及ばざることあるべし。此點より觀れば、鐵幹和尚と雖も、亦豈に業平に優れる所なしと謂ふを得んや。然るを俗人、徒らに俗想を以て、其美想の上に加へんとす、是れ甚だ品子の心事を解せざるものにして、品子より之を觀れば、其貧、其困、其世の非難、すべて彼の女に好箇の歌題を興へしものにあらざるなきを保し難し。斯くの如くにして、始めて其美的生活を求むるを得べく、又其美想を養ふを得ん。

彼の女が、竹、柏園一派の俗歌人と、其趣きを異にする所以、それこゝに在

るか、而して其歌詞の實に高調を帯びて、今日の歌壇を獨歩する所以亦こゝに存せずんばあらざるなり。

### △飽くまでも樂天的

眞の美的生活には、煩悶なるものなし、草木國土、悉皆之を美化せり、自然の變化、社會の狀態、すべて好箇の歌題とならざるはなし。されば當世流行の煩悶なるものは、必竟其詩境歌境に達せざるものが、中途にして魔道に踏み入り、美的生活と俗的生活との兩趣味の爲めに、板挿みとなれるより起れるものにして、彼の星と董とに懊惱するは、即ち是れなり。若し晶子の如く、其趣味を美的にし、眞の美的生活を求むるものな

らしめば、正々堂々戀愛も歌ふを得べく、更らに之を實現するも憚らざるべし。其然る所以は、彼の女は美的以外、名譽、財産等、すべて社會上の慾念に、心を牽かるゝ所なきを以てなり。

鐵幹和尚は、私行より觀れば、罪惡貫盈せる人物なり。照魔鏡に映せし所を以てすれば、彼れは女性を辱かしめ、女性を汚がせしこと、其數を知らず。此の如き男子は、一般女性の蛇蝎視せる所なり。女性は其愛の一方に集注すると共に、又其己れにのみ集注せられんことを希望するものにして、鐵幹の如き多情男子は、濃厚なる愛を人に與ふること難きが如く、又濃厚なる愛を、人より受くると難し。而も晶子の、彼れに與へたる愛は、濃厚にし、少して汚濁なきものなりき。鐵幹の晶子に送

りたる情も、或は爾かありしならん。是れ鐵幹品子の戀愛に於て、最も研究を要すべき所なりとす。

鐵幹品子の愛は、「一般男女兩性に於て之を見べき、相愛し相慕ふの情緒の、初めより發動したるにはあらざるなり。彼等の初めは、單に歌壇の關係に過ぎざりき。歌壇の關係に於て、先づ其美的思想を一致せしめ、美的思想の一致より、進んで愛戀を惹起したるものにして、彼等の結婚は、鐵幹の歴史が甚だ汚濁せるに拘らず、美神の媒合によりしものなりき。是れ品水を目するに、他の星と董とに懊惱して、戀愛に煩悶せるもの、若しくは戀愛の器具として、星と董とを云爲するものを以てすべからざる所以なり。

### △詩人の特徴

人動もすれば、詩人を責むるに、其多情多恨を以てするものあり。されど多情多恨なればこそ、詩人たるを得べかりしものたれ、多情多恨を去つて、詩人たれと望むは、猶ほ時かぬ種に、芽を出せよと望むが如し。されば鐵幹の如きも、亦多情多恨なり、多情多恨なるを以て、屢々其私徳を害せしこと多かりき。されど詩人の趣味を解するものは、亦詩人ならざるべからず、品子が鐵幹の罪惡を、深く咎めずして、其所天と仰ぐに至りしは、之が爲めなり。

鐵幹の曾つて韓國に在りしや、彼れは一白面歌人に過ぎざりき。其

詞藻未だ今日の如く、人に秀でたるにはあらずらうき。當時彼れは一舞  
妓を見て、其情に堪ゆる能はず、一新體詩を賦して、之に贈れるとありき。

姫舞

韓の都のつれくゝに、

生れは同じ西京と、

如何なる親の心より、

いとし娘を渡らせて、

十四十五は初花の、

言葉訛れる浮れ男に、

舞の姿にふきはしき、

今宵相見る酒の前、

先づ聞けるこそ嬉しけれ、

千里隔たる荒國へ、

なにとてさする勤めぞや、

まだ戀しらぬあどなさぞ、

弄ばるゝ悲しさよ、

春の御室の花扇、

歌の心になひたる、

ゆたかに上るふり袖に、

軽く翳せる舞の手に、

水に臨める白梅の、

月をかけたる紅梅の、

雨に綻ふ海棠の、

花の露よりなほもろき、

水に流るゝむくる子の、

羽子の羽よりなほ軽き、

乙女の春の樂しさは、

秋の嵯峨野の裾模様、

此世をしのぶ風情見え、

佛を招く力あり、

雪の膚のけだかさに、

襟にあまれる艶かな、

其いぢらしき口紅を、

人の操をかゆるなよ、

黒目がちなるまなざしを、

人の情けを移すなよ、

たい帯止めの蝶の夢、

「指の寶石に誰れの名も、

まだ見へぬこそ盛りなれ。

是れ新體詩として、固より唱すべき價ある程のものにあらず。たゞ之によりて鐵幹の多感多恨なるは、一舞妓に接して、既に斯の如きを知るに足る。されば其歌壇の天才晶子に觸れて、如何に愛慕の情を惹き起したりしか、晶子の詩人的性格、それ之に觸れて、豈に能く動かざるを得んや。

### △彼れも亦女性なり

晶子、鐵幹に嫁して數年の後ち、一子を擧げたり。當時彼等は、貧苦極に達し、衣垢つき、厨豊かならざりしも、尙は美的生活に満足したりが、

其一子の呱呱の聲を揚ぐるに及んで、彼の女も亦一女性として、端なく其愚痴をこぼしたることありき。彼れは其子に纏はしむるの衣なく、縋縋縋かに綴りて、寒を防がしめたりしが、其餘りに慘淡なる貧境を思ひ、無心の兒を抱きて、潜々涙を垂れて曰く、「若し汝の母をして、父母の言に従はしめば、汝は綺羅に包まれ、侍女に擁せられ、多福なる光陰の下に成長するを得べかりしに、不幸にして汝此貧家の兒となれり……」と。乃つて嗚咽して、氣絶えんとせりき。母子の情は、最も濃厚なる愛なり。男女相愛し相慕ふも、一旦其間に子女を擧ぐるに及んでは、却つて其の愛を子女に奪はるゝに至る。晶子既に一切の俗慾を、美的生活の犠牲となし、以て鐵幹と婚を結びしも、其兒に對しては、却つて其爲めに俗慾

を燃えしめぬ。されば彼の女は、鐵幹の爲めには、俗慾を犠牲にし、美的生活の爲めには、鐵幹の貧困に甘んじたるに反して、其兒の爲めには、未だ斯く迄に浮世を思ひ切る能はざりしか。

されど鐵幹は、到底歌壇の川上音次郎なり。川上音次郎は其俳優たる伎倆よりも、寧ろ興行師としての伎倆を有せり。鐵幹も亦歌壇の興行師なり、故萩廼家門下を籠絡し、自ら其牛耳を執らんとして、却つて一部の反感を買ひしが如き、確かに川上以上の人氣取り興行師たり。唯今日に於て、川上派が、新俳優に重きを爲すは、其貞奴の助けあるが如く、明星が多少の光芒を放てるは、晶子の力あるに依らずんばあらざるなり。

## 第七 川上貞奴

### △際物芝居

貞奴はもと芳町の藝妓にして、藝名を奴と呼ぶ、貞は其本名なり。後ち川上音次郎と結婚し、女優となるに及んで、貞奴と號せり。川上音次郎は、もと壯士なり、壯士が役者の真似をなして、世之を壯士芝居と呼びしもの、近年に至つて、新派演劇と自稱せり。されば川上が演劇上に於ける伎倆の如き、重きを同業者間に置くに足らずして、部下の新俳優を壓する能はず、動もすれば其一座の四分五裂を來たさんとせり。唯其

分裂を免るは、貞奴が能く部下を操縦して、其歡心を買へるに依れり。蓋し這般貞奴の手腕、其芳町時代に於て、之を養ひたるものならんか。何んとなれば、役者は、藝術家なり、藝術家は、狷介の僻を免る能はざるものなるに、彼れ獨り多少の雅量を有するは、其藝術家氣質に欠如したると共に、藝妓氣質の今に存せるが爲めなればなり。

貞奴と音次郎とは、役者にあらざるなり。芝居興行師なり。彼等は如何にせば人氣に投じ、喝采を博すべきやに應心するも、如何にせば其技神に入るべきやに關心すること少し。其技神に入ると、人氣を博するとは、二にして一なるが如きも、人氣を主眼とすると、技藝に重きを置くと、全く別にして、一は藝外の人となり、一は藝中の人とならざるべからず。

人氣を主眼とするは、興行師の爲すべき所にして、技藝に重きを置くは、役者の行ふべき所なり。而も彼等は、却つて人氣の投合を主眼として、縦令其所信を狂ぐるも、人氣の爲めには、之を惜まざらんとして、此雅量、豈に藝術に一生を委ぬるもの、容易に能くし得べき所ならんや。

されば彼等の演ずる所は、皆流行の際物にして、其時去り其熱覺むれば、又人の一顧を與ふるものにあらず。オッペケの歌、今如何、日清戦争の劇、今如何、オセロ、ハムレット、亦如何なる運命を齎らすべきか。久しからずして其名の世に忘却せられんは、知るべきのみ。若し彼等をして、其技に堪能なるものならしめば、團十郎が勸進帳に於けるが如く、陳

廣なる演劇も却つて人の呼物となるに至らん。彼等唯此特技なし、故に力めて新狂言に腐心し、其新奇にして人の見馴れざるに乗じて、其技倆を瞞着せり。オツペケは、遂にオツペケに終らざるを得ざるなり。

### △廣告の洋行

貞奴と音次郎とは、數回の洋行を爲せり、曰く、「一は西洋劇を學ばんが爲めなり」と。されど彼等の無學なる、何を以て短期の洋行によりて、洋劇の眞味を解するを得んや。西洋の文學を知らず、西洋の世態人情に通せずして、西洋劇を學ばんとするは、演劇の何物たるを解せざるものにして、彼等にして之を學び得たりとするも、是れ一の猿芝居に過ぎざ

るなり。加之漫然洋劇と云ふも、佛蘭西には、佛人の趣味あり、英人には、英人の趣味あり、獨人、米人、歐洲諸國、皆多少其の趣味を異にし、英國に喝采せらるゝもの、必らずしも獨逸に歡迎せらるゝものにあらず、米國の人氣に合するもの、必らずしも佛國の趣味に投ずるものにあらず。其然る所以は、各國其歴史を異にし、世態人情に差異あるに因れり。然るを彼等東洋人を以て、碌々語學を知らずして、異人種の演劇を見、其人情の機微に發動するを所以を研究せん。暴騰の至りと謂ふべきなり。されば彼等の洋行は、眞に西洋劇を學ばんが爲めにあらずして、兎に角西洋に遊んで、西洋劇と學びし眞似をなさんが爲に外ならず。彼等の演劇上に於ける伎倆は、從來の諸役者に比して、一頓地を抜く能はず、



又其劇題に於ても、之を内地劇に求むれば、他に巧みなるもの多きを以て、未だ人の評判を博するに足らず。是に於て其獨占にして競争なき舞臺を占領し、極めて新奇にして、極めて目馴れざる技を演じ、以て其名を傳へんとせり。彼等の洋行は、即ち彼等が廣告の爲めにして、貞奴も亦實は其一機關に過ぎざるなり。

更らに彼等の一座を見よ、一座中曾つて『お絹』を加へたりにあらずや、『お絹』は有名なる紅葉館の酌婦にして、長田秋濤の妾なり。其酌婦として、秋濤との艶聞に於て、名を得たりとするも、演劇上彼れ果して何等の伎倆を有せるか。而も彼等は、其有名にして、世人の注意を惹くと云へる一點を以て、之を其一座に加ふるに至つては、彼等一座の劇技を云爲す

る既に末なるを思はずんばあらざるなり。貞奴も亦『お絹』の亞流か。只惟む、其花井お梅を加へ、稻妻強盜を加へざりしを。而も其人氣を取ること、此の如く巧みに、部下を操縦すること、彼れの如く巧みなるは、其女性として劇界稀れに見る所、彼も亦當代の女傑たるに價せずんばあらざるなり。

## 現代女傑の解剖終

明治三十九年十二月卅一日印刷  
同四十年一月四日發行

正價金參拾錢

版權  
所有

編輯兼發行人 小笠原長彰

東京市京橋區木挽町二十四番地

印刷人 久米川治三郎

東京市京橋區木挽町十丁目六番地

發行所 萬象堂書房

電話新橋一四七九番

# 賣捌元

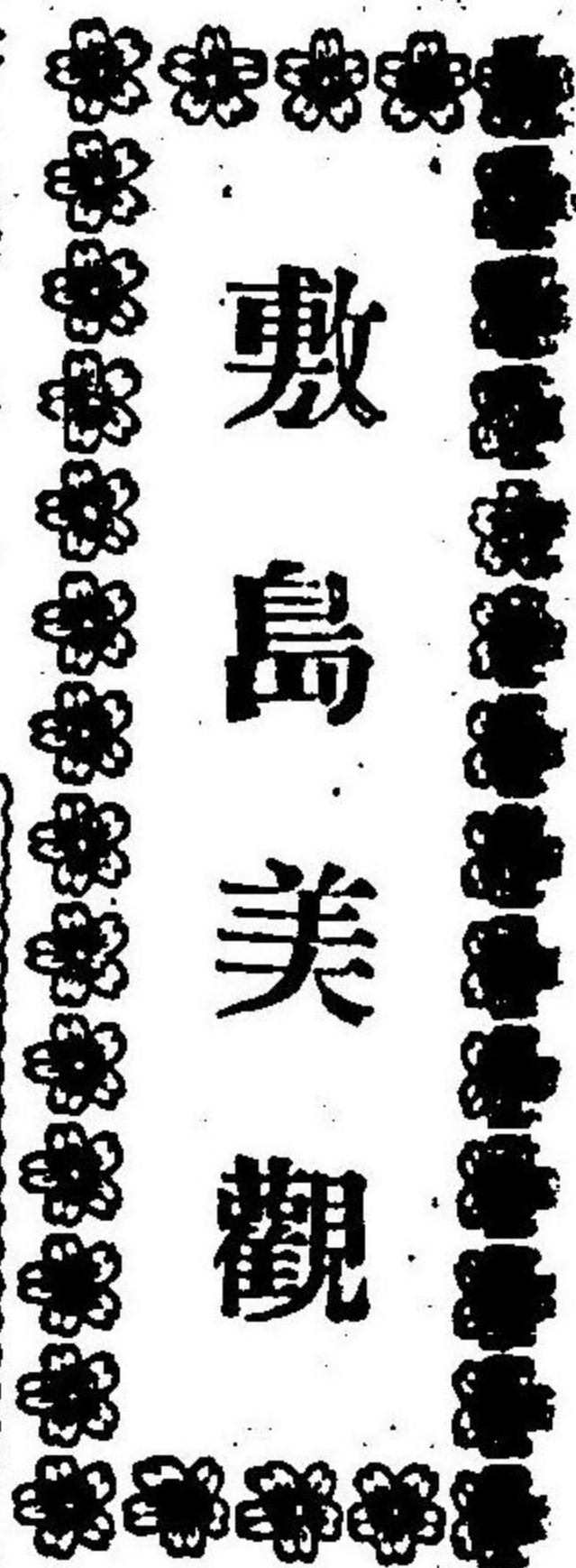
東京市京橋區木挽町十丁目六番地  
 合資 會社 **帝國地史編纂所**

電話新橋一七四九番  
 振替貯金口座六一四八番

# 大取次所

- 東京神田區表神保町
- 同 同 裏神保町
- 同 同 京橋區尾張町
- 同 同 銀座二丁目
- 同 同 繪屋町
- 大 阪
- 東 京 堂
- 上 田 屋 書 店
- 東 海 堂
- 服 部 書 店
- 會社 北 隆 館
- 吉 岡 寶 文 館

# 敷島美觀



全四百頁  
 正 價

特製 甲種二冊參拾圓  
 乙種二冊拾圓  
 並製 壹冊拾圓  
 壹冊拾圓

本書は我が日本に於ける名勝蹟堂塔伽藍風俗の寫眞凡そ二百餘種を鮮明なるコロタイプ版に印刷し之に和英兩文を以て説明を附したるものにして日本固有の繪畫と織物を巧緻に裝飾し之を披け坐ら世界の樂園に遊び博學親切なる案内者を得たるの想あらしむを既以て日本に遊びたるものは之を以て觀光の紀念となすべく未だ日本を見ざるもの之を以て日本に遊ばんとするものは之を以て東道者となすべし之を以て本書は今回戦勝紀念として名譽ある山下海陸軍諸大將の最新肖像を印刷して巻中に挿入せり

明治三十九年十二月

合資 會社

東京市京橋區木挽町十丁目六番地  
**帝國地史編纂所**

電話新橋千七百四十九番

# 大日本陸海軍寫真帖

全壹冊  
正價金四拾五錢  
郵稅金六錢

陸海軍省御許可近刊

## 明治卅七年 戰役紀念寫真帖

全壹冊  
正價金五圓

世に之に類するもの夥多ありと雖も或は卷秩浩瀚なるものは價貴に  
失し價格低廉なるものは質粗に失し以て此曠古無前の光輝ある戰役  
を長へに紀念するを得ず依て本所は茲に見るところあり陸海軍省の  
許可を得未だ世に顯はれざるものを網羅し以て戰捷の餘光を發揚せ  
んとす

### 發行所

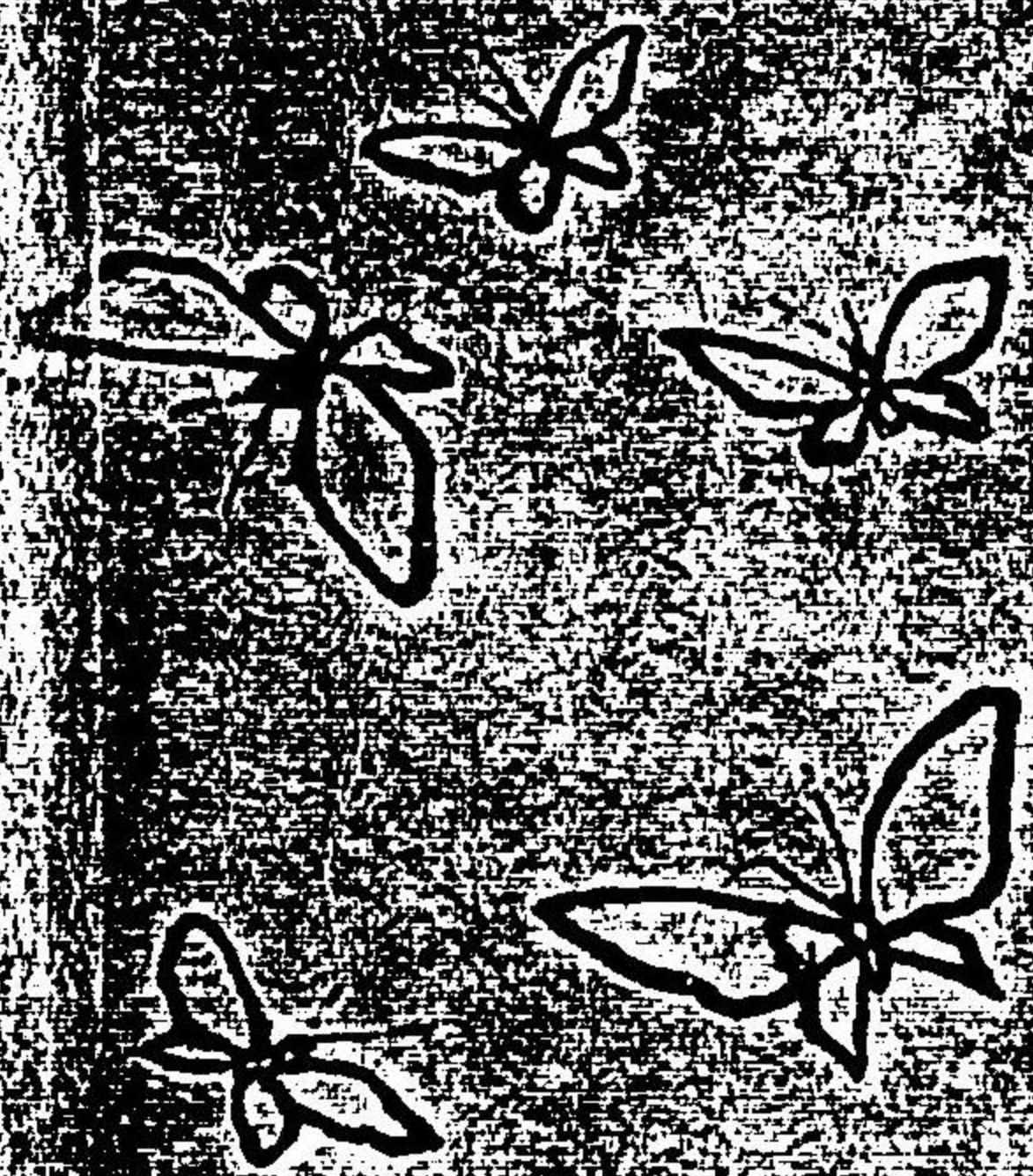
東京區橋本町十丁目六番地

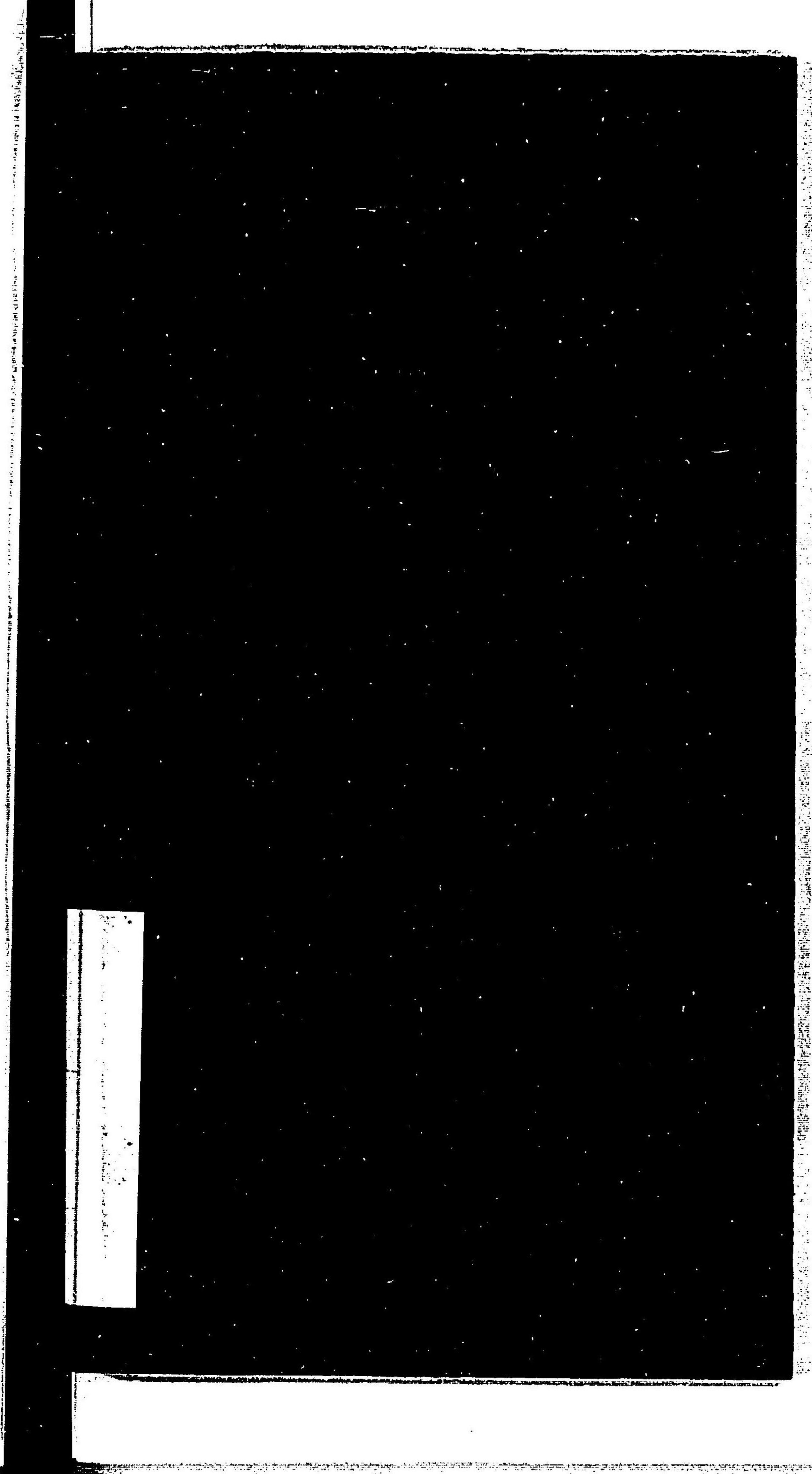
帝國地史編纂會社

電話新橋一七四九番

252

698





1950

1950

特47

836

現代女傑の解剖

国立国会図書館

004345-000-6

特47-836

現代女傑の解剖

九百里外史/著

M40

ACE-0792

